様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０８３３

研究課題名（和文）『平家物語』成立圏の歴史学的研究

研究課題名（英文）A Historical Study of the Compilation Process of Heike monogatari

研究代表者
川合　康（KAWAI, Yasushi）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：４０１９５０３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、国文学研究の成果が積み重ねられてきた『平家物語』成立圏について、治承・寿永内乱史研究の成果に基づいて、歴史学の立場から考察を行ったものである。Ⅰ『平家物語』諸本における「鹿ケ谷事件」譚の検討、Ⅱ「鹿ケ谷事件」譚を共有する鎌倉時代の文献・諸史料の検討、Ⅲ『平家物語』と相互交渉があった文学作品の検討、Ⅳ『平家物語』の影響を受けた諸史料の検討という四つの課題に取り組み、『平家物語』成立圏が鎌倉時代前期の慈円周辺にあったことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the compilation process of Heike monogatari which a large number of studies have been made on by literary scholars, based on especially results of Jisho-juei-rebellion studies, from a historical standpoint. Research subjects are four as follows, i research on a tale of Shishigatani-jiken in variant extant texts of Heike monogatari, ii research on historical documents written in Kamakura period including a tale of Shishigatani-jiken, iii research on literary materials connected with Heike monogatari, iv investigate to several historical documents influenced by Heike monogatari. This study point out that Heike monogatari was compiled around Jien and his community in preceding term of Kamakura period.

研究分野：人文学

キーワード：治承・寿永の内乱　平清盛　平家物語　鹿ケ谷事件　慈円　吾妻鏡　愚管抄　建礼門院右京大夫集

１．研究開始当初の背景

(1)　『平家物語』の成立に関しては、国文学研究において研究成果が蓄積され、次のような共通認識がつくられている。第一に、『平家物語』は近代文学のように一人の作者の個人的構想によって生み出されたものではなく、さまざまな場において成立した伝承・説話群が集積され形成されたと理解されること、第二に、『平家物語』生成の場は、そのような伝承や説話が、ある目的や方向性のもとに形成・収集・再編された場であり、そのような場を「成立圏」という概念でとらえていること、第三に、八十数種にのぼる『平家物語』の異本テクストのうち、延慶本が最も古態をとどめていることは認められつつも、それが鎌倉時代のいつ頃まで遡り、原初形態がいかなるものであったのかについては、必ずしも意見の一致を見ていないこと、第四に、『平家物語』の展開過程は、記事の増補により量的に拡大する方向性だけでなく、枝葉部分を省略して物語の完成度を高めようとする方向性の力も作用していたこと、などである。

(2)　私は 1985 年に鎌倉幕府荘郷地頭職の展開に関する研究を発表して以来、鎌倉幕府権力の形成を公武交渉の政治過程からではなく、治承・寿永内乱期（いわゆる源平内乱期）の政治過程や戦争状況から追究する研究を進めてきた。私が検討対象に据えた治承・寿永内乱期前後の政治史は、まさに『平家物語』が描いている平氏一門の栄華と没落の時期に重なっており、あらためて古文書・古記録などの一次史料が示す史実と、『平家物語』が記す事項との差異に気づくことになった。特に、『平家物語』が「盛者必衰のことはり」に基づいて、平氏一門の滅亡を必然視する歴史観を有していることに注目し、私はそうした歴史観を「平家物語史観」と呼ぶこととし、それが「古代的」な平氏権力の没落を必然視してきた戦後中世史研究にも、大きな影響を与えていたことを指摘した。

(3)　これ以降、私の研究関心は、「平家物語史観」から自由な立場で、内乱前後の政治史研究を進めるとともに、その成果からあらためて『平家物語』を読み直し、『平家物語』の虚構の意味を検討することに広がった。そうした関心から新たに取り組んだのが、平清盛の権力の実態解明である。なかでも、『平家物語』が他の記事と比べ圧倒的に多くの分量で描いている「鹿ケ谷事件」について、『玉葉』『愚昧記』『顕広王記』などの一次史料に基づいて詳しく実証的検討を行った。その結果、安元３年(1177)の平清盛による院近臣の捕縛・処刑は、後白河院や院近臣による平氏打倒の謀議が理由ではなく、彼らが延暦寺大衆と激しく対立し、延暦寺への武力攻撃を計画したことが直接の要因であったことを明らかにし、「鹿ケ谷事件」は、平氏一門・多田行綱滅亡後に創作された物語であったことを明らかにした。

(4)　このように「鹿ケ谷事件」を史実ではなく、虚構として理解し直してみると、例えば天台座主慈円が著した『愚管抄』にも、「鹿ケ谷事件」譚が記されており、『愚管抄』と『平家物語』との相互関係が新たな研究課題として浮上する。しかも、国文学研究では、『平家物語』には全諸本を貫いて存在する「原構想」と呼ぶべきものがあり、それは安元３年の「鹿ケ谷事件」に焦点を合わせて組み立てられていると指摘されている。とすれば、『平家物語』の成立は、「鹿ケ谷事件」譚の展開と密接に絡んでおり、『愚管抄』などの「鹿ケ谷事件」譚を共有する鎌倉時代の諸史料を詳しく検討することによって、従来の国文学研究とは全く異なる観点から、『平家物語』が形成された「成立圏」を追究することが可能になると思われる。そこで、本研究を計画することにした。

２．研究の目的

(1)　本研究は、従来、国文学研究において膨大な研究成果が積み重ねられてきている『平家物語』の成立圏に関して、私がこれまで進めてきた治承・寿永内乱史研究の成果に基づいて、歴史学の立場から検討を行うことを目的とする。

(2)　具体的には、『平家物語』の「原構想」の中核にあるとされる「鹿ケ谷事件」譚の展開を、鎌倉時代の文献・諸史料のなかに探るとともに、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される同時代の文学作品などを収集・検討することによって、『平家物語』の原型が形成された時期や、形成された場である「成立圏」について、歴史学的に追究することを目的とする。

(3)　研究を進めるにあたっては、次の４つの検討課題を設定した。

Ⅰ『平家物語』諸本における「鹿ケ谷事件」譚の異同の検討。

Ⅱ「鹿ケ谷事件」譚を共有する鎌倉時代の文献・諸史料の収集と検討。

Ⅲ『建礼門院右京大夫集』など、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される文学作品の収集と検討。

Ⅳ『吾妻鏡』や『百練抄』など、後出の鎌倉時代諸史料における『平家物語』の影響の検討。

以上のⅠ～Ⅳの課題について検討を進めることによって、『平家物語』の「成立圏」に関する基礎的事実を明らかにするとともに、形成されつつあった『平家物語』が、鎌倉時代の社会や思想・文化にどのような影響を与えたのかという新しい問題についても、考察を加えることとする。

３．研究の方法

(1)　本研究の基礎的作業として、「２．研究の目的」に記したような、Ⅰ『平家物語』諸本における「鹿ケ谷事件」譚の異同の検討、Ⅱ「鹿ケ谷事件」譚を共有する鎌倉時代の文献・諸史料の収集と検討、Ⅲ『建礼門院右京大夫集』など、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される文学作品の収集と検討、Ⅳ『吾妻鏡』や『百練抄』など、後出の鎌倉時代諸史料における『平家物語』の影響の検討、の４つの検討課題に関する史料の検索・収集を実施した。上記の課題に基づいて検索・収集対象とした史料類は、「延慶本」「長門本」「四部合戦状本」「南都本」「源平闘諍録」「源平盛衰記」などの読み本系『平家物語』、「覚一本」「屋代本」「百二十句本」「平松家本」「鎌倉本」などの語り本系『平家物語』を中心に、『愚管抄』『六代勝事記』『百練抄』『保暦間記』『皇帝紀抄』『帝王編年記』『建礼門院右京大夫集』『平家公達草紙』『安元御賀記』『吾妻鏡』などである。その他、治承・寿永内乱期の同時代史料として、『平安遺文』『鎌倉遺文』所収の古文書類や、『顕広王記』『愚昧記』『玉葉』『山槐記』『吉記』『明月記』などの古記録類も、必要に応じて検討対象に加えた。上記のうち、日本大学経済学部図書館、大阪大学総合図書館、大阪大学文学研究科日本史研究室が所蔵している史料集についてはそれを利用し、所蔵していないものについては購入して、史料検索・収集を進めた。

(2)　検索・収集した史料については、該当部分をコピーして、ファイルに綴じて手元に保管するとともに、パソコンの表ソフトに、諸史料の記述内容や異同箇所など必要な情報を整理して入力し、検討を行った。検討にあたって必要となった『平家物語』関係の研究文献や中世史関係の研究文献については、適宜購入を進めた。

(3)　『平家物語』の虚構の特質をより具体的に探るために、関係史跡の現地調査を実施した。「鹿ケ谷事件」譚の関係地としては、安元３年の延暦寺大衆強訴の舞台となった日吉大社・比叡山延暦寺（滋賀県大津市）や雲母坂（京都府京都市）、藤原成親が配流された有木別所（岡山県岡山市）などの現地調査を行った。また、平氏一門の関係地としては、平氏一門が信仰した厳島神社（広島県廿日市市）をはじめ、畿内近国の平氏方武士ゆかりの多宝塔・阿弥陀如来像を安置している三瀧寺（広島県広島市）、平氏一門が九州経営の拠点とした大宰府跡・安楽寺・太宰府天満宮・伝平重盛墓（福岡県太宰府市）、博多の櫛田神社（福岡県福岡市）、都落ちした平氏軍から小松家の平資盛・平貞能が離脱し、平清経が自害したと伝えられる豊後国柳ヶ浦（大分県宇佐市）、平氏一門と緊密な関係を有した宇佐神宮・宇佐公通居館跡安楽院（大分県宇佐市）、平氏一門の滅亡の地となった彦島清盛塚・赤間神宮・壇ノ浦古戦場（山口県下関市）などの現地調査を行った。さらに史料調査では、林原美術館（岡山県岡山市）において『平家物語絵巻』、厳島神社宝物館（広島県廿日市市）において『平家納経』、赤間神宮宝物館（山口県下関市）において長門本『平家物語』・『一の谷・屋島合戦図屏風』、太宰府天満宮宝物殿・九州国立博物館（福岡県太宰府市）において大宰府関係古文書、大分県立博物館・宇佐八幡宮宝物館（大分県宇佐市）において宇佐宮関係古文書などを閲覧し、史料調査を行った。

４．研究成果

(1)　Ⅰ「『平家物語』諸本における「鹿ケ谷事件」譚の異同の検討」については、読み本系の「延慶本」「長門本」「四部合戦状本」「南都本」「源平盛衰記」、語り本系の「覚一本」「屋代本」「百二十句本」「平松家本」「鎌倉本」における異同の有無を検討した。その結果、「鹿ケ谷事件」譚における①多田行綱の密告場所とその日時、②安元３年６月１日に始まる西光・藤原成親・院近習の捕縛の順番について、諸本によって記述が異なっていることが判明した。①については、語り本系は５月２９日夜で京の西八条邸、読み本系は５月２９日夜で場所不明、「源平盛衰記」のみ、行綱は５月２０日に西八条邸に向かったものの、清盛が福原に下向して留守だったため、２７日に福原まで赴き密告したとする。ちなみに『愚管抄』は、日時不明で福原の清盛邸として描いている。語り本系『平家物語』が、行綱の密告場所を京の西八条邸と描いているのは、『平家物語』が仁安４年(1169)以降の清盛の福原隠棲を描かないからであり、清盛がそれ以後も京の武士社会に君臨し、日常的に国政を左右する権力者として描こうとする『平家物語』の重要な虚構に関わっていると理解される。また、「源平盛衰記」の記述については、それが成立した時点において、『愚管抄』のような記事を参照し、双方を折衷的に取り込んだからと推測されよう。②については、読み本系・語り本系ともに『平家物語』諸本の多くが、藤原成親→院近習→西光の順に捕らえたとし、「長門本」「源平盛衰記」だけが院近習→西光→成親の順で捕縛されたと描いている。史実は、安元３年の延暦寺大衆強訴の当事者である西光→成親→院近習の順であるが、『平家物語』諸本の大半が成親の捕縛を最初に描いているのは、鹿ケ谷の謀議の中心人物を成親として描き、その謀議の発覚から政変が始まったかのように「鹿ケ谷事件」譚を構成しているからと判断される。「長門本」「源平盛衰記」において異なる記述がなされた理由は、現時点では不明である。

(2)　Ⅱ「「鹿ケ谷事件」譚を共有する鎌倉時代の文献・諸史料の収集と検討」については、

『平家物語』のほかに『愚管抄』『六代勝事記』『皇帝記抄』『百練抄』があり、南北朝期の史料として『保暦間記』『帝王編年記』があることが確認された。これらの史料は、政変の際の捕縛の順番が、一次史料から判明する史実とは異なり、『平家物語』諸本の記事と共通することが確認された。そのなかで、慈円の『愚管抄』における「鹿ケ谷事件」譚は、『平家物語』の記述に先行する可能性が高いという見通しを得た。また、承久の乱後の段階で成立したと推測される『皇帝紀抄』は、多田行綱の「中言」を頭書として記すとともに、安元３年から治承元年への改元を『平家物語』と同様に史実と異なる時期に設定しており、『平家物語』の影響が強く及んでいることが判明した。

(3)　Ⅲ「『建礼門院右京大夫集』など、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される文学作品の収集と検討」については、『建礼門院右京大夫集』『平家公達草紙』『安元御賀記』などを中心に検討を進めた。そのなかで特に、『建礼門院右京大夫集』における平維盛の入水と後白河院五十歳の御賀における青海波の舞姿の回想は、『平家物語』の主題に関わる虚構と同一であり、形成されつつある『平家物語』との相互交渉が想定されるとの知見を得た。また、『建礼門院右京大夫集』の平資盛に関する記述についても検討を行った。平氏都落ちに遅れて合流した小松家の資盛は、寿永２年(1183)１０月に平氏軍が九州を離れる際、家人平貞能とともに九州に留まったと推測されるが、建礼門院右京大夫は、『平家物語』『吾妻鏡』と同様に資盛は壇ノ浦合戦において討死したとし、資盛が早い段階から討死を望んでいたと記している。『建礼門院右京大夫集』のこの記載は、資盛が帰京する意向を伝えていたとする同時代史料と齟齬をきたしており、内乱後数十年を経た段階で、貴族社会では平氏一門の滅亡についての定型的な理解＝「物語」が成立し、『建礼門院右京大夫集』はそれに基づいて書かれたものと理解される。

(4)　Ⅳ「『吾妻鏡』や『百練抄』など、後出の鎌倉時代諸史料における『平家物語』の影響の検討」については、鎌倉幕府編纂の『吾妻鏡』が、東国における頼朝挙兵から平氏一門の滅亡までの合戦記事において、『平家物語』から大きな影響を受けていることを確認した。寿永３年(1184)２月の生田の森・一の谷合戦の記事について、『吾妻鏡』と『平家物語』諸本の比較検討を行い、合戦の修飾表現にほぼ同一のものがあり、合戦譚の構成では、『吾妻鏡』が読み本系ではなく覚一本『平家物語』に近いという知見を得た。そして、『吾妻鏡』が一の谷の戦場しか描かず、『百練抄』も源義経の出陣しか記していない点から、国文学研究で指摘されている通り、鎌倉時代後期成立のこれらの文献が、『平家物語』が創作した架空の合戦空間である「一の谷合戦」像に強く影響されていることがわかった。また、土佐房昌俊による源義経襲撃記事については、同時代史料が児玉党による襲撃とし、土佐房昌俊の存在が見えない一方で、『平家物語』『愚管抄』『吾妻鏡』『百練抄』には共通して記されており、虚構の可能性も含めて今後検討する必要性のあることが判明した。

(5)　「鹿ケ谷事件」譚は、『平家物語』よりも慈円の『愚管抄』の記述が先行し、かつその内容が、安元３年の政変における後白河院・院近臣と延暦寺大衆との厳しい対立を隠蔽して、平清盛の専制的権力と院近臣との対立に読み替えようとするものであったことを踏まえると、鎌倉時代前期に天台座主に４度も任じられ、院権力とも協調していた慈円のもとで成立した可能性が高いように思われる。慈円は、安元３年の政変時点では比叡山無動寺で千日籠山修行中であり、延暦寺大衆の動向を兄九条兼実に報告している。それにもかかわらず、史実を改変して「鹿ケ谷事件」としてあえて『愚管抄』に書いていることに、意図的な作為が感じられる。「鹿ケ谷事件」譚、さらにはその発展としての『平家物語』成立圏の中心に慈円が存在したことは、疑いがないと考えられる。なお、本研究において『平家物語』と相互交渉の関係にあったと推定した『建礼門院右京大夫集』の著者右京大夫は、文治５年(1189)頃に兄尊円とともに慈円の僧坊に同宿していたこともあり、右京大夫が慈円と交流があったことが知られる。慈円や右京大夫が交流する文化圏のなかで、「鹿ケ谷事件」譚や『平家物語』の原型が形成されたのでないかと推測される。今後、より詳細にこの仮説を実証していくことが求められていると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

①川合康、鎌倉幕府の成立を問い直す、歴史地理教育、査読無、815 号、2013、pp.10−17

②川合康、鎌倉幕府の成立時期を再検討する、じっきょう地歴・公民科資料、査読無、No.76、2013、pp.7−10

③川合康、京武者論と平氏権力、史友会会報、査読無、27 号、2012、pp.7−12

④川合康、「鹿ケ谷事件」考、立命館文学、査読無、624 号、2012、pp.235−248
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/lt/rb/624/624PDF/kawai.pdf#search

⑤川合康、鎌倉幕府の草創神話―現代人をも拘束する歴史認識―、査読無、27 号、2011、

pp.41−57

〔学会発表〕（計 5 件）
①川合康、治承・寿永内乱期における和平の動向と『平家物語』、第 27 回中世政治史研究会、2014 年 7 月 13 日、東京大学史料編纂所（東京都）

②川合康、書評・山本隆志著『東国における武士勢力の成立と展開』、第 21 回中世政治史研究会、2013 年 2 月 2 日、東京都立桐ヶ丘高等学校（東京都）

③川合康、「源平」の京武者と治承・寿永の内乱、共同研究〔「文化現象としての源平盛衰記」研究〕公開講演会、2012 年 11 月 17 日、國學院大學渋谷校舎（東京都）

④川合康、「鹿ケ谷事件」と『平家物語』、2012 年度待兼山史友会総会、2012 年 4 月 14 日、大阪大学文学部（大阪府豊中市）

⑤川合康、平清盛をめぐるいくつかの論点、第16回中世政治史研究会、2012年1月21日、日本大学経済学部（東京都）

〔図書〕（計 6 件）
①川合康、笠間書院、文化現象としての源平盛衰記、2015、728（pp.542−559）

②川合康、大阪狭山市役所、大阪狭山市史 第一巻 本文編通史、2014、783（pp.131−146）

③川合康、清文堂書店、中世の人物 京・鎌倉の時代編 第一巻、2014、422（pp.269−303）

④川合康、岩波書店、岩波講座日本歴史 第六巻 中世一、2013、310（pp.61−96）

⑤川合康、朝日新聞出版、週刊新発見日本の歴史 06 源頼朝と武家政権の模索、2013、38（pp.4−6,8−15）

⑥川合康、勉誠出版、秩父平氏の盛衰、2012、339（pp.215−235）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川合　康（KAWAI,Yasushi）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０１９５０３７

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：